

創作ダンスの長期グループ活動に関する研究

The Research on Long-Term Group Activity of Creative Dance

キーワード：ダンス作品創作、長期活動、省察

奥野 知加 木原 寛子

I はじめに

昭和63(1988)年に「全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)大会」(以下、神戸大会と称す)が開催されて以来、大学生の創作ダンスへの取り組み方が一変したと思われる。それまでは学生対象の全国レベルのコンクールは行われておらず、創作ダンスは主に自主的な発表公演によって公開されていた。この神戸大会開催を機に、大学名を冠した創作ダンス作品を競うコンペティションが行われるようになったのである。

多くの大学の創作ダンスクラブは、この大会に臨むにあたり作品創作活動の様相を変えている。特に創作活動期間は長期化し、長い大学では1年間創作活動を行っているという。筆者らが知る大学ダンスクラブでも変化がみられる。作品出演者を、オーディションによって選出するようになり、活動期間も5ヶ月～6ヵ月間と長くなった。

それまでは、学生各自が指向する作品を2ヶ月～3ヶ月程度取り組み、発表(公演)するという活動であったことから考えると、大きな変化であるといえよう。

このように神戸大会へ向けての創作ダンスの作品創作活動は、選ばれた出演者による、作品完成・発表に向けての長期的な活動となったのである。

創作ダンスのグループ活動による作品づくりは通常、表現したいイメージやテーマをふさわしい個や群の動きに置き換えて構成し、テーマに沿ってひとまとまりに仕上げ、踊り込んで発表するという活動である。

実際には、作品づくりにおける様々な課題を、その都度何らかの方法で解決し、グループの合意を得

ながらひとつにまとめ、完成に向けて進めていくというもので、これが長期間となると、そこには作品づくりに関する課題は勿論のこと、それ以外の問題や案件が多々あるものと思われ、様々な課題が混在する活動であることが想像できる。

筆者らは、このような神戸大会に向かう長期的なダンス作品創作の活動過程を、活動者がどのように捉えているのか明らかにしたいと考えた。

ここで得られた結果を活動者に返し、指導者と活動者が共有することで、今後の活動に新たな手がかりや指針が得られるものと考えた。

創作ダンス関連の先行研究において、このような長期間のグループ活動を研究対象にしているものは、これまで確認しておらず、今回の研究が、創作ダンスの長期グループ活動に関する研究の先駆けとなるものと思われる。

II 研究方法

1. 方法の概要

研究対象事例は、平成21年度の第22回全日本高校大学ダンスフェスティバル(神戸)大会に参加した大学のダンスクラブの一連の活動で、出場者決定から結果発表までの期間、約5ヵ月間(3月～8月上旬)である。

研究方法は、振り返り調査(リフレクティブ・リサーチ)より得られた資料を検討した。

振り返り調査は、同学年の活動グループが、話し合いによって活動の全過程を振り返り、作図(含む・

語句/イラスト)するという共同作業を行った。これによって得られた図3枚を検討資料とした。

この作図作業で得られた資料には、活動当事者の視点で捉えた活動の様態が記載されることから、本研究資料として有効な手掛かりとなり、また活動を共にした同学年が、話し合いながら活動全体を振り返ることで、活動の追体験を共有することができる。それはまた、当時の活動や自己を客観的に捉える機会ともなり、活動を省察¹することができると考えた。

2. 活動推移図と統合活動推移図の作成

(1) 活動推移図の作成方法

この調査は、同学年グループによる作図作業で、神戸大会終了から約5カ月後に調査を行った。

方法は、同学年の活動グループが一室に集まり、話し合いながら当時の活動の、出場者決定から大会最終日までの出来事を時系列的に思い出し、それを定形用紙(縦40cm 横200cm)に日付と共に記入していくという作業である。

更に、各自が好む色や方法(語句/イラストなど)で、その時点での各自の心境を書き込む。その際に、その時点の気分のレベルも示していくという作図作業である。気分のレベルは[-10]～[+10]としたが基準は各自の判断に任せた。

作業の途中で研究者がスナップ写真を撮るために1分程度入室した以外に人の出入りはなく、調査に当たっては、自然で自由な雰囲気づくりに配慮した。

作図作業の様子及び作成した3枚の活動推移図を資料1、2に示した。

(2) 「統合活動推移図」の作成

ここで作成した3枚の「活動推移図」を統合し、「統合活動推移図」(図1)を作成した。

この図には、活動全体を捉えるために活動者が記入した時系列に沿った活動項目を「創作活動の流れ」として示した。それに3枚の「気分のレベル」の統合とを併せて記載した。

この「統合活動推移図」は、活動全体が活動者全員の気分のレベルとともに見ることができるよう作成したものである。

3. 調査対象について

(1) 調査対象者

某大学ダンスクラブ所属学生で、第22回全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)大会への出場者18人のうちの16人(4年4人、3年8人、2年4人)。

(2) 活動期間及び活動場所

- ・活動期間:平成21(2009)年3月4日～8月6日
- ・主たる活動場所:同大学体育館

(3) 調査期日

- ・平成22(2010)年1月9日

(4) 第22回全日本高校大学ダンスフェスティバル(神戸)大会について

- ・主催:(公社)日本女子体育連盟/神戸市教育委員会
- ・開催期日:平成21年8月4日(火)・5日(水)・6日(木)
- ・開催地:兵庫県神戸市・神戸文化大ホール

(5) 活動システム

調査対象グループの活動には、既存の活動システムとして、次のようなことが取り決められていた。

・活動計画:

本活動は、作品の構想や構築を活動者全員で検討していくグループ活動で、活動のリードは通常4年が行う。4年は作品完成に向けて活動計画をたてるが、神戸大会の規定で、毎年6月中旬(本活動では6月22日)に作品の完成形を大会本部に紙面で提出をする。従って、一応の作品完成をこの6月中旬に合わせ、活動計画はたてられている。

・合宿活動:

通常4年の計画によって期間中に1回行われる。本活動においても実施された。過去には実施しない年もあった。

・指導者:

指導者は必要に応じて不定期に関わり、適宜アドバイスや活動支援を行う。また、場合によっては全体の軌道修正を行うこともある。

4. 倫理的配慮

本研究は、所定の手続きをふみ実施している。研

究協力者に対しては、以下のような事柄を口頭で説明し同意を得ている。

1. 研究への参加は任意である。研究に参加しなくても悪影響が及ぶことはない。
2. プライバシーは保護される。
3. 一度参加しても途中で中断することができる。
4. データ収集後でも辞退できる。
5. 中断や辞退をしても何ら悪影響が及ぶことはない。

その他、個人が特定される可能性があるような事柄には極力配慮した。

III 結果

1. 「統合活動推移図」にみる活動の概要

「統合活動推移図」を作成することによって、本活動の全体の流れが明らかになった。そこにおける活動の内容から本活動を、第1期・第2期・第3期・第4期に分けることができた。「統合活動推移図」にはそれを明記した。各区分における活動の様態をみることで、本活動の内容の詳細を捉えることができると考える。

(1) 第1期(3月)〈作品概要決定期〉

第1期(3月)は、神戸大会の出場者がオーディションで決定し、その出場者全員で作品の題材・テーマ探しを行った時期である。約3週間かけて、作品のテーマや大枠が決まり、3月下旬には他大学の作品

鑑賞をする時間を設けている。

第1期のオーディション直後の活動者の気分のレベルは、 $[+10] \sim [-10]$ と振幅が大きく分散的で、各自の心境がバラバラであったことが分かる。しかし「テーマの決定」(3月下旬)で気分は急に上昇し、「他大学のダンス作品を観る」(3月末)においても上昇を維持している。

この第1期(3月)は、様々な心境で活動を開始していた活動者が、作品の概要決定(3月下旬)を機に気分のレベルを上昇させている。つまりここにおける決定には、活動者全員の合意と賛同が得られているということの表れである。

(2) 第2期(4/5月)〈作品構築の模索・創作活動期〉

この期は実際に作品づくりを行う創作活動期である。まず、テーマ探求のために4月初旬に学外での活動(「昆虫館²に行く」)を実施し、その後は動きづくりを開始している。「昆虫館に行く」という時点での気分のレベルは、前期「テーマの決定」より高位を示しており、作品テーマに関する活動者の興味や関心の高さが気分のレベルに表れている。

しかしその後の、動き・構成の創作活動(4月後半)から合宿(5月初旬)にかけて全員の気分レベルは下降し、合宿では最低を示している活動者もみられる。その後、気分の低位は少々上昇するも、この期の終盤(5月末)の創作活動は、大半の活動者がマイナ

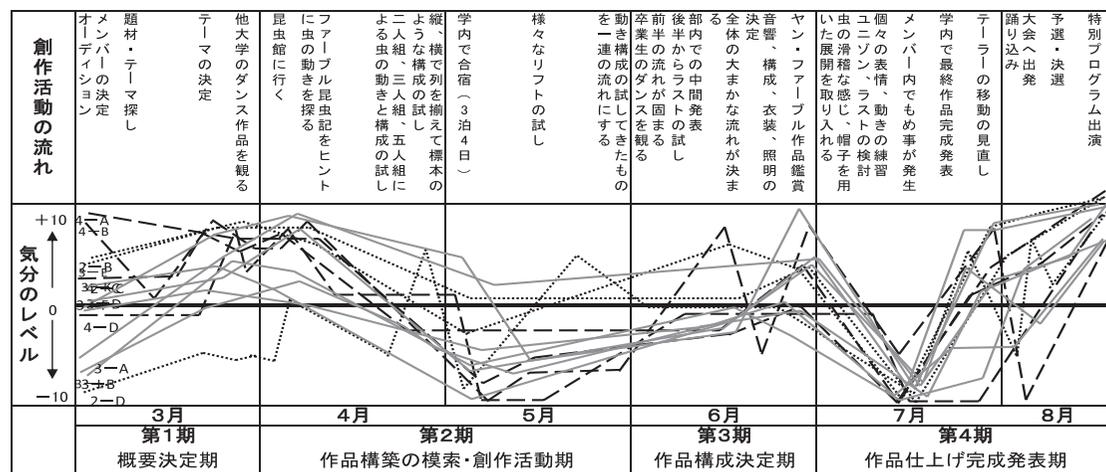


図1 統合活動推移図

ス域に留まっている。

この期の活動の気分レベルは、1ヶ月間で下降し、合宿で最低に達し、その後の1ヶ月間には目立った上昇はなく停滞をみせているという状態であった。

(3) 第3期(6月)〈作品構成決定期〉

この期の6月22日には、作品の完成形を大会本部に報告するため、それに合わせて一応の作品完成(「全体の大まかな流れが決まる」)をみている。この一応の作品完成時においても気分レベルは、2人(3年1人・4年1人)以外は上昇していない。

作品は概略を報告後、完成に向けて、報告の範囲で変更することができるため、報告時の気分のレベルからみて、その後の作品の変更が予測される。

その後一転して、この期の終盤(6月末)の学外での活動(「ヤン・ファール³作品鑑賞」)に、気分の急上昇がみられる。

(4) 第4期(7/8月)〈作品仕上げ完成発表期〉

この期は作品完成期であるが、7月中盤のある一点(「メンバー内でもめ事が発生」)において、全員が低位を示している。しかしその直後の「学内での作品完成発表」(7月末)、「大会へ出発」(8月初旬)で、殆どの活動者が上昇をみせている。また神戸大会の現地活動では上昇傾向を示し、最終日には全員が高位に達している。

この期は活動場所の移動や活動形態に変化がある時期で、それに伴う気分のレベルの上下動が大きい活動者もみられる。特に4年は、「テラーの見直し」、「大会へ出発」における気分の上下動が大きいことが分かる。しかし出発後から現地での活動は、ほぼ全員が気分のレベルを上昇させている。

以上の第1期から第4期までの活動の流れを、次のようにまとめることができる。

活動当初は活動者の気分のレベルが分散的でまちまちであったものが、約1ヵ月後の作品題材の探求時(「昆虫館へ行く」4月初旬)には全員が集中的に高位を示しており、ここに活動者の題材に対する興味や関心度の高さが分る。

その後の創作活動や動きの探求において、気分レ

ベルは下降し、合宿(5月初旬)では全員の集中的な低位がみられる。合宿後の気分レベルの上昇は緩やかで、マイナス域での停滞が長い(5月下旬から6月下旬)。この作品創作活動における気分停滞の中、作品鑑賞(「ヤン・ファールの作品鑑賞」6月下旬)において、一気に気分レベルが上昇していた。

その後の活動では、「メンバー内でもめ事が発生」(第4期7月中旬)で、集中的に全員の気分が下降し、本活動における最低位を示しているが、次の段階の活動(「作品完成発表」)で急上昇している。

その後は大会出発と現地での活動(第4期/8月初旬)となり、そこにおける気分のレベルは日毎に上昇し、最終日は全員が高位を示していた。

以上が活動者の気分のレベルにみる、活動全体の様態である。全体の流れの中に、際立つ2度の気分レベル低域と、3度の高域がみられた。

2. 気分のレベル集中時期について

「統合活動推移図」(図1)で、気分のレベルが低域と高域に集中している箇所についてみると、気分のレベルが低位集中している箇所は、「合宿」(第2期/5月初旬)と「メンバー内でもめ事が発生」(第4期/7月中旬)の2箇所である。

一方、気分のレベルが高位での集中箇所は、「昆虫館へ行く」(第2期/4月初旬)、「ヤン・ファールの作品鑑賞」(第3期/6月下旬)及び「大会出発から現地での活動期間」(第4期/8月初旬)の3箇所であった。

(1) 気分レベルの低位集中について

「統合活動推移図」(図1)における、気分レベルの低位時期(2箇所)について、3枚の「活動推移図」に記入されている、各時期における記入語句を抽出しまとめてみた(資料3・4)。ここに表記した語句は抜粋で、複数の同義語を一例表記したものである。以下、資料5・6・7も同様である。

最初の低位時期「合宿」(第2期/5月初旬)の記入語句を資料3に示した。ここからは気分低位の理由の観点が2つあることが分かる。ひとつは、話し合いが昼夜を問わず長時間続き、混迷を来していたこと

(語句例1～6)。もうひとつは身体的な疲労や怪我、筋肉痛を訴えているものである(語句例7～10)。

- | | |
|--------------------------|----------------|
| 1 話し合い悩んだなあ | 2 夜中までの話し合い疲れた |
| 3 夜の話し合い答えはすごく簡単なような気がする | |
| 4 夜の話し合い、寝たかった | 5 ちょっと不安 |
| 6 昼の話し合いも夜の話し合いも煮詰まった | |
| 7 頑張るぞ、筋肉痛の恐怖 | 8 疲れた |
| 9 筋肉痛MAX腕がプリプリ | 10 怪我イターイ |

資料3 「合宿」の記入語句

もうひとつの低位時期は、「メンバー内でもめ事が発生」(第4期7月中旬)である。この時点の記入語句を資料4に示した。ここには、語句の記入以外に、火山の爆発・稲妻などのイラストが記入され、それらは赤や青の太い線と強いタッチで描かれていた。

このような紙面から、この時点では活動者全員が関わることで意見の食い違いがあったと思われる。それも激しいものであったことが、語句やイラストの記入状態から読み取ることができる。

しかし、気分レベルの低位はこの時点のみで、その後はすぐに上昇をみている(2人以外は全員)。つまり、もめ事は深刻で激しい衝突であったが、この時点で概ね解決または収束したと考えられる。資料4の語句で、「いろいろあったけど皆で一致団結してやりたいです」(6)から、それが推測できる。

- | | |
|---------------------------|-----------------|
| 1 話し合いで爆走爆発 | 2 理解に苦しむ |
| 3 Yに怒られる | 4 ドカーン自分の弱さに気づく |
| 5 違和感を持つキライ? スキ? | |
| 6 いろいろあったけど皆で一致団結してやりたいです | |
| 7 いざこざ | 8 頭が混乱 |
| 9 自分の思いを言いました | 10 言う! |

資料4 「メンバー内でもめ事が発生」の記入語句

そのほか、上記以外の気分のレベル低位傾向箇所を図1よりみてみると、次の部分があげられる。

第2期の合宿活動後(5月後半)から第3期(6月前半)の作品完成時期(「全体の大まかな流れが決まる」)にかけて比較的低位である。

ここでは、直前の合宿活動の影響も考えられ、この時期(5月後半)の作品構成や動きの発見、つまり創作活動における難行や混迷が考えられる。

引き続き6月中旬まで、気分の停滞がみられ、一応の作品完成時期(6月22日)では、2人(3年1人・4年1人)以外は気分レベルが上昇していない。ここからは、活動者の多くが作品の出来ばえに、あまり満足していないという状況が読み取れる。

(2) 気分レベルの高位集中について

「統合活動推移図」(図1)によると、本活動においては3回の集中的な気分の上昇が確認できる。

最初の高位時期は、題材取材のための学外での活動「昆虫館へ行く」(第2期/4月初旬)である。オーディション直後の分散的な気分レベルが「昆虫館へ行く」に向かって上昇を示している。この時点での記入語句を資料5に示した。

ここには、作品題材である昆虫についての高い興味や関心度がうかがえる語句がみられ、それを更に作品づくりに関連させているものもみられる(語句例2・6)。

- | | |
|---------------------|---------------|
| 1 虫について興味up虫に感動 | |
| 2 虫を見て創作早したい | 3 本物の虫に刺激を受ける |
| 4 虫ってすごい | 5 虫ってかわいい |
| 6 虫って面白いファーブルの想像膨らむ | |
| 7 虫気持ち悪い | |

資料5 「昆虫館へ行く」の記入語句

次の気分レベル高位時期は、「ヤン・ファーブル作品鑑賞」(第3期/6月下旬)である。これは創作活動の一環として、活動者全員で作品鑑賞に出かけた時である。この時点での記入語句を資料6に示した。

ここでは活動者が、鑑賞作品から驚きに似た強い刺激を受けている様子が見られる(語句例1・2・3・4)。また作品鑑賞を自己の取り組みに重ね、意欲的になっていることもわかる(語句例4)

- | |
|---------------------------|
| 1 ヤン・ファーブルの世界に魅了された |
| 2 まさかの裸に戸惑いまくり・・・ |
| 3 ヤン・ファーブルの内容驚愕、表現のすごさに!! |

- 4 想像とは違う舞台にびっくり! やる気がわく!!
5 自分が場違いな場所にいる気がした、色んな人がいる

資料6 「ヤン・ファブル作品鑑賞」の記入語句

最後の気分レベル高位時期は、大会出発から現地での三日間の活動期間(第4期/8月初旬)である。現地での活動は、日増しに気分レベルが上昇し、最終日は最高位のレベルを示している。この時点での記入語句を資料7に示した。

ここでは、活動の内容が多様であることから、記入語句の観点も多岐にわたっている。

- | | |
|-----------------------|------------|
| 1 うきうき楽しむぞ! | 2 新幹線楽しい出発 |
| 3 久しぶりの神戸の熱さにテンションあがる | |
| 4 予選が一番楽しくできた | 5 予選大失敗 |
| 6 上級生にメッセージいただく | |
| 7 Tさんに怒られて・泣く | 8 絆が深まる |
| 9 緊張58%しあわせ42% | |
| 10 予選はやっぱり緊張した | 11 賞とるぞ! |
| 12 Tシャツありがとう | 13 全ての人に感謝 |

資料7 「大会出発から現地の活動」の記入語句

IV 考察

1. 活動における課題

前項で活動の全体が明らかになったことを踏まえ、本活動における問題点や課題について考察する。

(1) 4年の状況を踏まえる

本活動において改善されなければならない活動期は、中期(第2期/第3期)であると考えられる。ここでは長い期間、気分の低位停滞がみられる。先に、作品創作活動における気分低位を指摘したが、それがこの活動中期にあたる。ここでの活動が、生き生きと活発に行われ、創作過程が充実することが、本活動の基本でもあると考えられる。またそれが、作品の成果にもつながるものと思われ、ここでの活動の内容を重要視したいと考える。

この期における気分のレベル低位の詳細をみると、

4年が低位を占めていることが分かる。

また、第3期6月の「作品の流れが決まる」においては、4年(1人)が気分上位を突出した形でみせているが、これは他の活動者との気分の乖離とみることができる。

ここでは、本活動のリード役である4年が、活動の進捗を慮って気分のレベルを低下させていることが推察される。一方で、4年の気分レベルの所在が、活動全体に影響を及ぼすことも自明のことであり、この期における4年の低位停滞の理由を探ることが、原因究明につながると考える。

また第3期6月の「作品の流れが決まる」における、4年(1人)と他学年の気分のひらきは、ここにおいて作品決定の合意が得られなかったことを表している。作品創作の重要な決定をする時期にこのような状態では、全体をまとめることは困難であると考えられる。次の時点(「音響、構成、衣装、照明の決定」)での気分降下がそれを表している。

以上のようなことから、同じような観点で、本活動全体をみることも必要であると考えられる。各時点での4年の様態や心境を知ることと、合わせて4年と他学年の関係をみていくことが、気分低位や課題解明の手がかりを得ることになると考える。

(2) 気分レベル低域の探求

長期グループ活動において、顕著な気分低位の状況は避けるべきであると考えられる。本活動における該当期は、「合宿」(第2期/5月初旬)と「メンバー内でもめ事が発生」(第4期/7月中旬)であった。ここでの後者(「メンバー内でもめ事が発生」)は一時的な低位であり、次の段階で気分の上昇をみていることから、問題視する事柄ではないと考える。

しかし、前者(「合宿」)については、合宿時の気分低位がその後の創作活動にまで波及していることから、本活動の問題点としてみる必要があると考える。合宿における気分低位の理由は、話し合いの混迷と、それによる活動の停滞が心身の疲労につながったものである。本活動における合宿については、なぜ話し合いの混迷が活動の停滞に連動したのか、原因を明らかにする必要があると考える。

(3) 気分レベル高域の継続的展開について

本活動における気分レベルの高位時期は3回あった。「昆虫館へ行く」(第2期/4月初旬)、「ヤン・ファール作品鑑賞」(第3期/6月下旬)及び、「大会出発から大会終了」(第4期/8月初旬)である。

これら3回の高位時の活動は、通常の活動場所(体育館)を離れた、外部(学外)での活動であることが判明している。また活動における気分上昇の観点は、題材や作品発表に関わる、発見や驚きの感受であったことも確認している。

今回のような長期活動における活動場所の移動・変化は、それ自体が活動者の気分転換や気分一新につながると思われ、更にその活動に驚きや発見が伴うことで、上昇気分が生成されたものと考えられる。

ここにおける課題は、活動場所の移動・変化によって得られた成果を、次段階に繋げていくことにあると考える。今回の活動にはその成果はみられなかった。長期活動における、活動場所の移動・変化については、活動過程における適切な配置と内容の見極めが重要な観点となると考える。

そのほか、最後の気分レベル高位期は、「大会出発から大会終了」(第4期/8月初旬)であった。ここでは、気分レベルの観点に関連しない状況が資料7に見られる(「Tさんに怒られて泣く」、「予選大失敗」、「緊張58%しあわせ42%」)。それにもかかわらず、活動者全員が気分レベルの上昇を示し、高域に達していた。

ここでの活動は、活動者の同一目的に向かう協同の意識が強化されていたと考えられ、それが気分の上位維持を支えていたものと考えられる。また結果的に本活動が、当初の活動目的を達成したことも、気分上昇に影響していると考えられる。

V 結論

長期的なダンス作品創作のグループ活動において、振り返り調査(リフレクティブ・リサーチ)の結果、活動者が捉えた本活動を、以下のようにまとめることができた。

1. 活動者の気分のレベルで捉えた本活動は、活動内容から、第1期から第4期に区分できた。

全体の流れは、活動当初は気分のレベルが分散的でまちまちであったものが、題材の探求時(「昆虫館へ行く」4月初旬)には全員が集散的に高位を示した。しかし、その後の創作活動や動きの探求において、気分レベルは下降し、合宿(5月初旬)では低位を示していた。合宿後は、マイナス域での停滞が長い(5月下旬から6月下旬)が、作品鑑賞(「ヤン・ファールの作品鑑賞」6月下旬)において、気分レベルが上昇していた。その後の活動では、「メンバー内でもめ事が発生」(第4期7月中旬)で、集散的に全員の気分が下降するも、次段階の活動で(「作品完成発表」)で急上昇し、続いての大会出発と現地での活動(第4期/8月初旬)では、日毎に気分レベルが上昇し、最終日は全員高位を示していた。

以上が活動者の気分のレベルにみる、活動全体の様態である。また全体の流れの中に、2度の気分レベル低域と、3度の高域が集散的にみられた。

2. 活動中期に長い気分の低位停滞がみられる。この期における低位停滞の原因を知るにあたり、4年の状態の詳細をみることにし、4年と他学年の関係を明らかにしていく必要があると考察した。
3. 2度の気分レベル低位のうち合宿活動については、その状況から本活動における今後の課題であると捉えた。合宿における気分低位の理由は、話し合いの混迷と、それによる活動の停滞が心身の疲労につながったものである。なぜ話し合いの混迷が活動の停滞に連動したのか、原因を明らかにする必要があると考察した。
4. 本活動における3回の高位時の活動は、全て

外部(学外)での活動であった。気分上昇の理由は、活動場所の移動・変化に伴う、活動者の気分一新によるもの、及び当地での発見や驚きの感受にあった。長期活動における活動場所移動・変化に関する問題は、その状況を次段階へ繋げることが要点であり、そのために適切な配置と内容の見極めが重要であると考察した。

VI まとめと今後の課題

今回の調査研究は、活動者が体験した長期活動を、活動者の視点から明らかにし、それを検討・考察することで、今後の活動の指導指針を得ようとするものである。

この観点から、本調査によって本活動の全体が把握できたこと、及び活動者の気分の高位及び低位の状況や理由が明らかになったことは、指導者にとって貴重な指導資料を得たと考えている。

また本研究調査から、今回の活動における課題も明らかになった。今回に限っての課題であるのか否かは、更なる継続研究を待たなければならないが、今回の結果と考察を踏まえることは、今後の活動において重要であると考ええる。課題は以下である。

活動中期の作品創作活動における、4年の状態の詳細を知ること、及び他学年と4年の関係を明らかにする。

また話し合いの混迷が、なぜ活動の停滞に運動するのかについて、特に合宿活動における場合につい

て、原因を明らかにする。

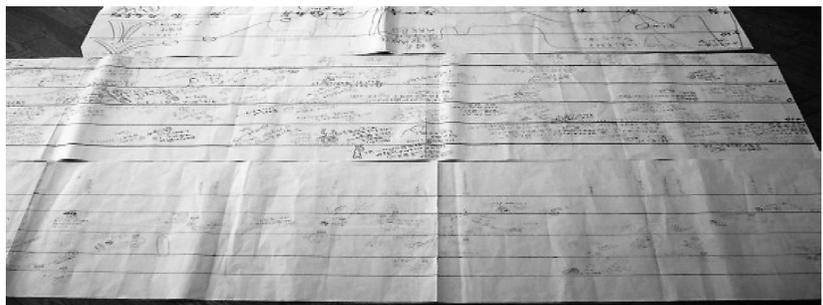
最後に、長期活動における活動場所移動・変化に関する問題は、その状況を次段階へ繋げることが要点で、適切な配置と内容の見極めが重要である。この観点で本活動を顧みることである。

本研究は、この調査自体が本活動における省察であると考ええる。従って、今研究の結果及び考察を活動学生と共有し、本活動における上記課題の解決に向かって活動者とともに更なる検討を重ねていきたいと考える。

また、今回の調査事例は、結果が目的達成(活動者が言う)を果たした事例であった。今後、目的を達成できなかった事例を含む、多くの事例の調査研究を継続して行いたいと考えている。

注

- 1 省察(reflection)「振り返り」と同義、「反省」と「内背」とは峻別。ドナルド・A・ショーン(2007)柳沢昌一ほか訳『省察の実践とは何か』鳳書房vはじめに抜粋
また、デューイ(J. Dewey)は省察的思考を経験の中で生じる問題解決のための探究を誘う思考であるとして位置づけている(Dewey 1993)。佐伯胖(監修)2010『「学び」の認知科学事典』大修館書店p.259抜粋
- 2 NPO日本アンリ・ファールル会 ファールル昆虫館「虫の詩人の館」
- 3 ヤン・ファールル(Jan Fabre, 1958年)ベルギー・アントワープ出身、芸術家・演出家・振付家



(左) 資料1 「活動推移図」作成の様子

(上) 資料2 「活動推移図」 縦40cm/横200cm(2枚)、縦40cm/横150cm(1枚)